

いもう 葦毛通信



ムカゴニンジン

2023年10月16日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町三丁目1
TEL: 0532-56-6060

No. 146

1、大規模植生回復作業計画を変更します！

葦毛湿原で行っている大規模植生回復作業は2013年1月から開始し、その作業内容や経過は『葦毛通信』にリアルタイムで報告してきました。当初から全体的な計画があったのではなく、小規模な実験と観察を繰り返して植生回復作業のやり方が定まり、2016年1月の葦毛通信 No. 32で「葦毛湿原大規模植生回復作業」として提示し、2018年11月の葦毛通信 No. 72～76で中間のまとめの報告を行いました。

現在は第3段階（湿地中心部の遷移を後退させる）の作業を行っており、終了した段階で第4段階（恒常的な維持管理を行う）に移行する予定でした。しかし、第3段階を終了させてから第4段階へ移行することが難しいことが分かりました。また、現在も恒常的な作業は行っており、実質的には第3・4段階の作業を同時に進めていることとなります。

1) 作業計画を4段階から3段階へ

これまで作業計画は以下の4段階で行う予定でした。

第1段階：湿地中心部の日照を確保する。

第2段階：森林化した湿地を復元する。

第3段階：湿地中心部の遷移を後退させる。

第4段階：恒常的な維持管理を行う。

第2段階までは木を伐ってネザサやコシダを除草し、木の根やネザサの根を除去する作業には重機を使って大規模に行い順調に作業は進みました。しかし、第3段階に入ると湿地中心部で行う作業は基本的に手作業に限られ、重機を使って大規模に行うことが難しいことが分かりました。

湿地中心部は遷移を後退させるために実験地を作って経過観察してから大規模に遷移を後退させる作業を行うつもりでしたが、湿地中心部の状況は多様で実験区を多く設定して対応しなければならず、かなり時間がかかる作業となりそうということが分かりました。

また、実験地を設定して経過を観察すると、追加で作業を行わなければならない場合があることもわかりました。例えば、O地点では根を除去せず除草だけをしたところはイヌノハナヒゲが優勢になって他の植物の発芽が抑えられることが分かりました。イヌノハナヒゲを根から除去したところでもイヌノハナヒゲが増えていくことが分かり、再度根から除去する作業を追加しました。つまり、実験地では経過を観察しながら追加の作業を行い、良好な状態を維持するために何を行うべきかを確認する必要があることが分かりました。

第4段階は外来種の駆除や、ネザサ・コシダ等の優勢な植物を押さえるための草刈り作業を想定していました。また、これまでも外来種の駆除は4～10月の日常管理の期間には月1回駆除作業を続けており、11～3月の大規模植生回復作業においても、随時外来種の駆除を行ってきました。しかし、今行っている第3段階においても、実際には第4段階の作業も行っています。そこで、第3段階と第4段階を合体して、「**第3段階：湿地回復実験と維持管理を行う。**」として、複数の実験地を維持しながら経過を観察し、併せて外来種の駆除等を継続的に進めることとし、全体を3段階で行うという考え方に変更しました。

2、2023年度モニタリング報告－8

葦毛湿原では秋の花がやっと咲きそろってきました。サワシロギクやイワショウブは満開になり、スイランも咲き始めてきました。サワギキョウは開花の終盤を迎えています。これから、ホソバリンドウやウメバチソウが開花してくると思われま

1) O地点

O地点は、昨年イヌノハナヒゲの根を除去する作業を行いました。作業直後（右上写真）には植物が無い状態でしたが、ハルリンドウやトウカイコモウセンゴケが咲き、現在も一部でミミカキグサが咲いています。また、やや乾燥したところを中心にイヌノハナヒゲも発芽してきましたが、まだ小さな株のままです（右下写真）。今年の作業では、イヌノハナヒゲは根から抜き、裸地状態を保つようにするつもりです。

O地点は、画面奥は除草作業を、画面手前の実験地はイヌノハナヒゲを継続的に根から除去して裸地のまま維持し、どのような植物が発芽するのか経過を観察していきます。



O地点作業直後（2023年4月5日）



O地点6か月後（2023年9月20日）

2) I 地点 (センサーカメラ)

I 地点は木道に囲まれたところで、大規模植生回復作業開始以前から、他地点 (実験的に植生回復作業を行ったところ) との比較のために手を付けずにそのままにしてきたところです。

また、中央の木道沿いは葦毛湿原では数が少なくなったホソバリンドウが残っている貴重なところです。このホソバリンドウがイノシシに攪乱されると危機的な状況になると予想されたので、動物監視のために中央部にあるやや乾燥し木が侵出した島状部にセンサーカメラを設置しました。

このカメラに、8月21・22日の2日間に亘ってイノシシが地表を攪乱する画像が撮影されました。

写真に写っているところはネザサやコシダの根を手作業で除去したところで、作業後、シンジョガヤの仲間が多く発芽していたところです。

ここをイノシシは直径3mほどで何度も掘り返し、最後には裸地化しました。イノシシの攪乱は継続せず、10月14日に再度



I 地点イノシシ攪乱前 (2023年8月21日)



I 地点イノシシ攪乱中 (2023年8月21日)



I 地点イノシシ攪乱後 (2023年8月22日)

30分ほど攪乱している画像が撮影されました。現地ではミミズは確認しておらず、イノシシが何を目的に攪乱したのかは分かりませんが、植物の根を食べた可能性が考えられます。

3) D・E地点(防鹿ネット設置地点)

D・E地点は2013年1月に大規模植生回復作業を最初に始めたところで、三の沢の下流部にあたり、今年、防鹿ネットを設置したところです(葦毛通信 No. 143 参照)。これまでのところ、ネットの外側ではニホンジカ、ニホンイノシシ、ハクビシン等がセンサーカメラに写っていましたが、ネット内に動物が侵入した形跡はありません。

三の沢下流部は大規模植生回復作業によって木を伐って伐根して裸地化し、その後順調に湿生植物が発芽し、重機による伐根作業後4年目にはシラタマホシクサが大きな群落に復活しました(葦毛通信 No. 42・49・52 参照)。

その後イノシシによる大きな攪乱があり、シラタマホシクサは衰退して分布範囲が細断されて面積が少なくなっていました。イノシシの攪乱は断続的に続いていましたが、今年ネットで囲ったためにイノシシの侵入が無くなり、シラタマホシクサの群落は昨年(右写真上)より分布域を広げ大きな群落になりました(右写真下)。



D地点のシラタマホシクサ(2022年9月5日)

防鹿ネットは、ニホンジカからノカンゾウやコバノトンボソウを保護することを主目的に設置しましたが、イノシシの影響を考える上でも、貴重なデータになったと思います。

イノシシが攪乱する影響は正と負の両方がありますが、今後も植生がどのように変化するかを観察していきたいと考えています。



D地点のシラタマホシクサ(2023年9月30日)